

# Be My Style

ひと・わざ・みらいへ

現代のライフスタイルにふさわしい発想と感性で、湖国にCoolな風を起こすものづくりの秘密に迫ります。

## 雅やかな雛人形の伝統に 女性のおしゃれ心を重ねて



仕上がりをチェックする東之華さん。女性らしい柔らかさと優美さを醸し出す「たっぷりとした生地感」に個性が表れる。



黒紫雛(こくしびな)の緋毛氈(ひもうせん)七段飾り。「黒紫」は平安王朝における衣服の最高位の至極色(しごくいろ)。

### 固定概念を覆す 美しく華やかな物語を 予感させる人形

桜の花びらが舞い散る中、仲睦まじく肩を寄せ合う二人。館を抜け出し野原をそぞろ歩きながら和歌を詠み交わす男女を包む夜の静寂。二人はどんな日々を過ごしてきたのだろうか…。女流人形作家・東之華さんのお雛様を見ていると、頭の中で次々に物語が紡ぎ出されていく。

雛人形といえば女雛は赤、男雛は黒っぽい装束をまとうて金屏風の前に硬い姿勢で座っているものという固定概念は、東之華さんの「人形巧房ひなや」に足を踏み入れるとあっさり覆された。

まるで舞台の一シーンのような動きとストーリーを感じさせるポーズで、長い裾を引く衣擦れの音まで聞こえてきそうな人形の数々。衣装は淡いパステルカラー系から黒っぽい紫や深紅までさまざまな色調が揃い、どこか洋風の趣の内裏雛があるかと思えば古典的な愛らしさの七段飾りもある。雛人形がこんなにもわくわくするものだったとは！

「こんなお雛様は今まで見たことないと言っていたけど、すごく嬉しいですよ」と東之華さんは明るい笑顔で話す。まったく縁のなかつた人形師の世界に飛び



雛人形といえば段飾りをイメージするが、実は立雛(たちびな)が古来のスタイル。東之華さんの立雛を見ると、その世界観に圧倒される。

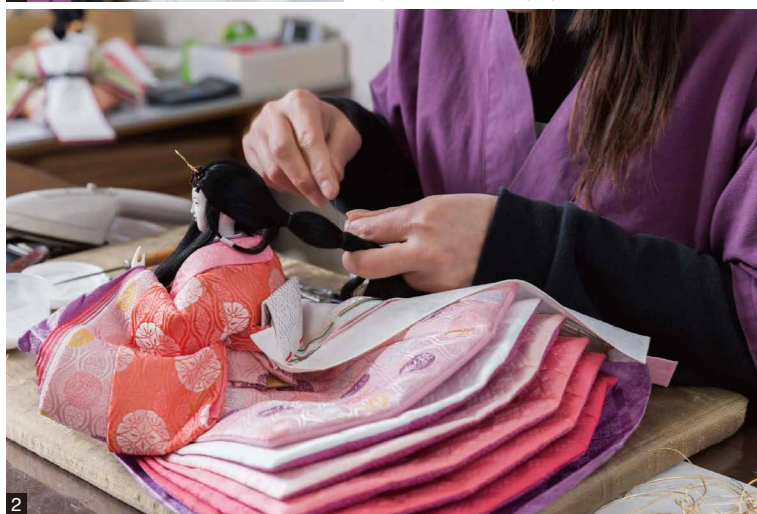
## 女流人形作家 東之華さん

人形巧房ひなや

草津市で「人形巧房ひなや」を主宰する女流人形作家・東之華さんは、日本の伝統文化に女性ならではの美意識と現代的な感覚をプラスした今までにない雛人形で、人形業界に新しい風を吹き込んでいる。色彩豊かな衣装をまとい、今しも物語が動き出しそうな華やぎに包まれた雛人形はいかにして生まれたのだろうか？



1:「針仕事もミシンも苦手でした。でも人形師を一生の仕事にしたい、師匠とずっと創作のアイデアについて話をしたい一心で師匠が制作する手元を見て学びました」と東之華さん。  
2:人形の頭は専門の頭師(かしらし)が制作するが、首の角度を考えながら人形に据え、垂髪(すべらかし)の毛を結ぶなどの仕上げはすべて人形師が行う。





雛人形としては斬新な夜のイメージ。黒い生地にたっぷり金糸を織り込んだ豪華な衣装が映える。東之華さんは人形だけでなく背景や小道具を含めてトータルにデザインする。



「お雛様について勉強する中で、一千年以上も前の通過儀礼がお雛様を通じて現代の私たちとつながっていることに驚きを感じました」

## 定型にとらわれず 素朴な疑問から新たな 雛人形を創り出す

雛人形の世界は見るものすべてが新しく、その一つ一つ意味を知りたくなかった。反物屋に初めて行った時は生地的美しさに舞い上がり「こんなに色と柄の美しい反物がいっぱいあるのに、どうして雛人形は赤と黒っぽい衣装ばかりなんですか？」と素朴な疑問を投げかけて東之湖さんを困らせた。

「何でもかんでも師匠に尋ねてうるさがるれ、しまいに『自分で調べろ!』と言われて(笑)。十二単のこと、着物のパーツの名前、お雛様の歴史など次々に興味が広がって、自分で本を買って勉強しました」

平安時代の宮廷装束の約束事を踏まえていけばもっとさまざまな色の衣装があってもいいのではないかと、源氏物語絵巻をイメージした「源氏雛」や、平安時代に最も高貴とされた色の衣装を着せた「黒紫雛」を師匠と共に考案。さらに、袖や裾の自然な襷はどんな風に出るのか、従来の肘の位置は高すぎて不自然ではないかと疑問を感じれば、自分自身十二単を着用して師匠と相談しながらより美しい肘の角度を研究し、ついには十二単の高倉流着付けまで習い始めた。

「花を見てもドレスを見ても、趣味の温泉

### DATA

#### 人形巧房ひなや 草津本店

草津市草津3丁目14-30  
TEL.077-563-8900  
http://touka-hinaya.com/



東近江市五個荘の「商家に伝わるひな人形めぐり」で、東之湖さんと東之華さんが出演するイベントが開催されます。詳しくは4ページをご覧ください。

巡りで露天風呂から夜の海をぼんやり眺めていても、新しいアイデアがどんどん浮かんできて手が追いつかないんですよ」  
創作が楽しくて仕方がないという澁刺とした気持ちで柔らかな笑顔からあふれる。  
4年間の修業の後、師匠・東之湖さんから「東之華」という名前を贈られて独立し、2008年、草津市に「人形巧房ひなや」を構えた。  
「私が舞台の上で実現できなかったことを人形がやってくれていると感じています。衣装や背景など全てを一つの作品として、季節感や女性ならではのおしゃれ感を表現していきたいです」

込んで以来、日本文化や衣装の構造、歴史などを理解した上で創意工夫を凝らすことにこだわり続けてきた。衣装の色ひとつをとってもただ美しいからというだけでなく、それぞれに意味を込めて作っている。  
「平安時代は色の黄金時代。当時の貴族は御簾で顔を隠して見えないのは袖口のあたりだけでしたから、衣装の袖の色のかさねで季節感を出して自分を表現していました。色のかさねは女性にとってはとても大事なおしゃれだったんです。そういう女性ならではの気持ちがあるから、昔の人たちが色に込めた思いに寄り添って、杜若のかさねや桜のかさねなどの衣装を再現しています」

## 女優志望から人形師へ 人生を変えた 運命的な出会い

20代の初めまで、東之華さんは伝統工芸とはまったく無縁の生活を送っていた。高校時代からタレント活動を始め、卒業後は女優を目指して鹿児島から東京へ。しかし、慣れない都会での一人暮らしで肌が荒れ、次第にタレント活動に消極的になっていった。同世代のライバルたちが活躍している姿をテレビで見たくなって朝から晩まで外で働き続け、さらに心身をすり減らしていく。そんな日々

の中、何気なく通りがかった百貨店の物産展で運命的な出会いをする。

「何か目の端にちらっと見えたものが気になつて足を止めたんです」

そこにあったのは、青いグラデーションの十二単を着た人形。子どもの頃から外遊びが大好きで人形に興味をもったことなど一度もなかったのに目が離せなかった。独特の雰囲気をもった人形の佇まいに、そして制作実演をしている大柄な男性の繊細な手仕事に心ひかれて声をかけてみた。その時気さくに話をしてくれた東近江市五個荘の人形師・東之湖さんの元へ、数年後押しかけるようにして弟子入りするとは夢にも思わずに。

東之湖さんが東京で実演をするたびに会場を訪れ、雛人形師の仕事や雛人形の意味について尋ねた。知れば知るほど雛人形に深く魅了されていった。

「お雛様は一生もの。人生の大切なお祝い事に関わる雛人形師という仕事のすばらしさを知り、さらに大病を抱えながらも仕事に打ちこむ東之湖さんの人間性に触れるうちに、いろんなことから逃げてばかりいた自分だけれど、この仕事なら一生逃げないで続けられると心を決めました」  
手仕事どころか裁縫の経験さえまったくなかったが、木工仕事のような工程からミシンかけまで、作りたい一心で師匠の手元をじっと見て学び、夢中で師匠の技を吸収した。

## 東之華流のこだわりここがひと味違う!

「柔拵え」と呼ばれる着せ付け方で自然な生地の流れを出し、袖口のふんわりとした女性的な柔らかさを表現。「西陣織などの硬い生地をいかに柔らかく見せるかにこだわっています」。

### 柔拵え



十二単の袖口にわずかに見える裏地と表地の色合わせ「かさね」の色は十二単の美しさが凝縮した部分なので手間がかかってもゆずれないポイント。この色合わせで季節感を表現する。写真は伝統的なかさねの色「杜若」。

### かさねの色



十二単の正面の真ん中に、東之華さんが「裾襟」と表現する部分があるのもこだわりポイントの一つで、これを額縁仕上げにしている。生地を重ねて厚くすることでボリューム感が生まれる。

### 裾襟



正面からは見えない後ろ姿にも十二単の装束を忠実に再現している。衣を締める「襷」を後ろへ長くひく姿も優美。

### 後ろ姿

